



あとがき



確かにCOVID-19はまだ市井には出回っていることを試験期間の学生からの病欠連絡で感じている日々ではありますが、症状や治療法などが明らかとなってきて、なんとか定常的な1年間を過ごすことができるようになってきました。今回寄せていただいた会議報告記事からは、忙しくも本来あるべき会合の様子を読み取ることができました。初めての合同開催となった核データ+PHITS研究会には私も学生を連れて久々に参加することができ、懇親会でも多くの方の元気な姿を見ることができて、人と人とのつながりを強めることができたと感じました。IAEA関連の会合は比較的早めに対面の会議に戻った印象ですが、その頻度も平時になったと感じました。しかし、全てが時計の針を戻したわけではありません。過去には会合の集合写真にオンライン参加のメンバーが列席することはあまりなく、人類が難局を乗り越えて世界をまたひとつ狭くしたと捉えることができます。COVID-19以前よりももっと近く緊密な関係が世界に広がる、そんな明るい未来を予感させました。太田さまには波瀾万丈の研究者生活を紙面狭しと書いていただき、特に間も無く社会に旅立つ新社会人の皆さんにはひとつのロードマップとして貴重な記事となっているのではないのでしょうか。渡辺氏の部会賞の記念記事に目を向けると、2021年6月号のあとがきで「本邦の原子力・放射線の分野にも機械学習の波がようやく到来してきた」と記載させていただきましたが、現在では我々が使用する機械学習の本質は関数フィッティング・・・回帰問題であることが周知の事実となってきたことを実感します。誰もが核データ評価や実験データの挿入などに自由に機械学習を使いこなせる時代が到来することでしょう。山野先生の記事は共分散を用いた核データの誤差伝播に関するTotal Monte Carlo法による成果に関するものでした。ほぼ同時期に私もアンフォールディング法で中性子収量を求めた際、核データの不確かさをどう伝播させるかについて検討をおこなっていたため、個人的にもずっとウォッチしていたご研究で感無量でした。

さて、最後になりましたが春の到来もうまもなくです。皆様が新しい年度を爽やかな気分で迎えられるように祈念するとともに、新博士の皆様にはぜひ核データニュースへご自身のご研究・学生生活に関する記事を寄せていただきますようお願いして、今回の後書きを閉じさせていただきたいと思います。

金 政浩 2024年1月

日本原子力学会核データ部会

核データニュース編集小委員会

合川 正幸 (北大)

岩本 修 (原子力機構)

大塚 直彦 (委員長、IAEA)

金 政浩 (九大)

小浦 寛之 (原子力機構)

中村 詔司 (原子力機構)

丸山 修平 (原子力機構)

山野 直樹 (RADONet)